七海まち／著
ななミツ／イラスト

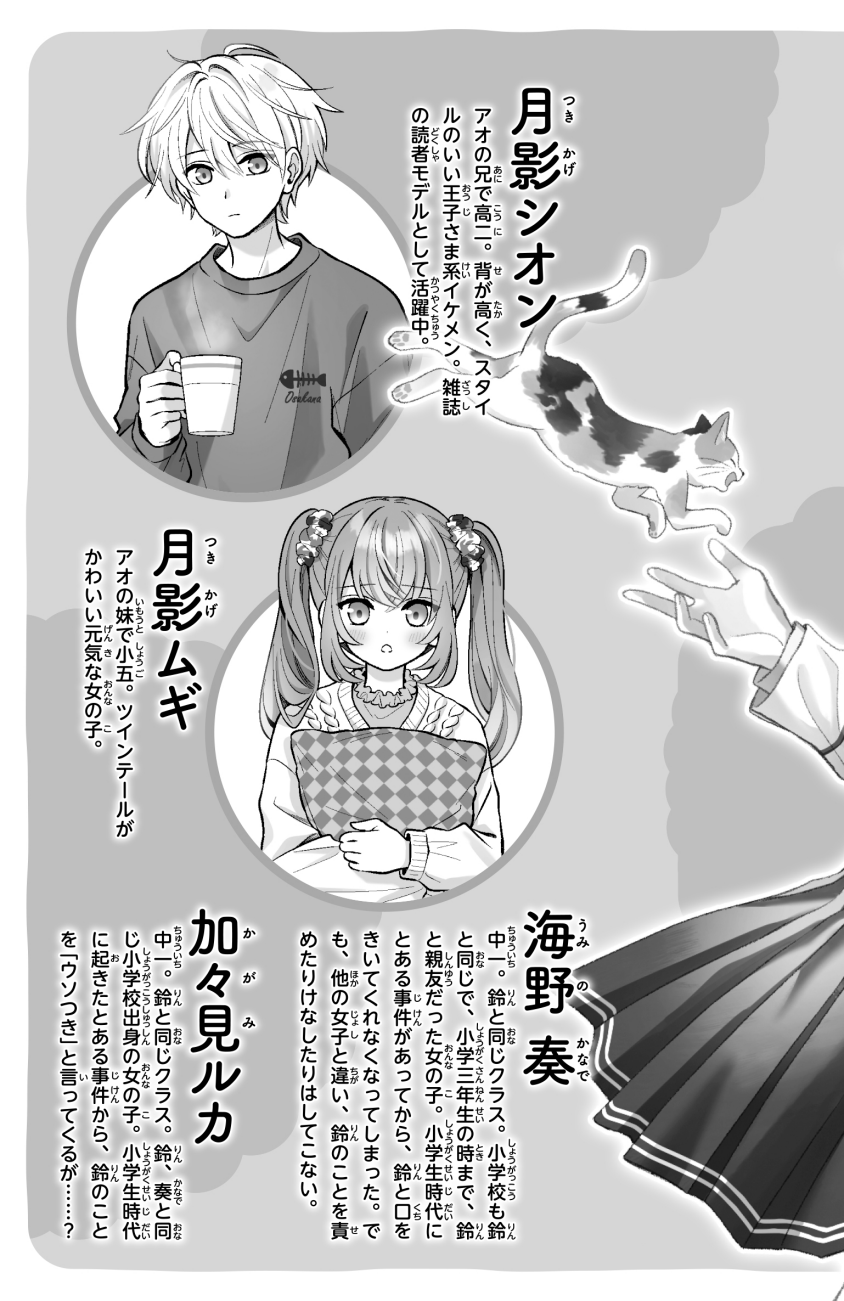
PHP
ジュニアノベル

月影アオ

中一。どことなく猫に似た雰囲気を持つ男の子。鈴と同じクラスで鈴とは席順が前後。誰とも仲良くせず、一人で過ごしているクールな性格。かくれイケメン。猫と話していたり、木から落ちてもケガひとつなく着地したり――猫みたいな行動をとっている彼の正体は……？

春風鈴

中一。猫好きだけど猫アレルギーの女の子。猫が好きすぎて猫の気配を察知する勘に近い能力「猫レーダー」があり、その能力で野良猫を見つけては遠くから眺める毎日を送っている。小学生時代に起きたとある出来事がきっかけで、中学に入学してからもクラスで孤立している。昔仲良しだった猫・コハクに似ているアオのことがなにかと気になる。



月影シオン

アオの兄で高二。背が高く、スタイルのいい王子さま系イケメン。雑誌の読者モデルとして活躍中。

月影ムギ

アオの妹で小五。ツインテールがかわいい元気な女の子。

海野奏

中一。鈴と同じクラス。小学校も鈴と同じで、小学三年生の時まで、鈴と親友だった女の子。小学生時代にとある事件があってから、鈴と口をきいてくれなくなってしまった。でも、他の女子と違い、鈴のことを責めたりけなしたりはしてこない。

加々見ルカ

中一。鈴と同じクラス。鈴、奏と同じ小学校出身の女の子。小学生時代に起きたとある事件から、鈴のことを「ウソつき」と言ってくるが……？

目次

猫レーダー …… 005
再会 …… 010
コハクの思い出 …… 014
うたがいの目 …… 021
懐かしい感触 …… 031
【Side: アオ】危険人物 …… 040
尾行作戦 …… 043
少しだけ …… 048
【Side: アオ】決意 …… 054
もしかして？ …… 059
まさかの申し出 …… 066
【Side: アオ】修行の書 …… 075
友達活動、始まる …… 078
楽しい時間 …… 084
アオくんの不思議 …… 089
【Side: アオ】予想外 …… 100
突然の不安 …… 105
猫が好きな理由 …… 112
【Side: アオ】メッセージ …… 119
気づき …… 124
事件 …… 134
大事な友達 …… 145
雪解け …… 152
秘密 …… 157
アオくんは猫男子 …… 174
あとがき …… 189

猫レーダー

（おおっ。いたいた……！）

木々に囲まれた、無人の神社。

そのご神木の陰で、私――春風鈴は、ごくっとつばを飲みこんだ。

私の視線の先にいるのは、一匹の白猫。顔がほっそりとしていて、体つきもスリム。

この特徴は、メスだ。優しそうなイエローの目を細めて、リラックスしたように体を地面に投げ出している。

（はああっ！　かわいいっ……！）

興奮のあまり鼻息が荒くなってしまい、あわてて手でおおう。

猫は、すごく耳がいい。犬にはかなわないけど、鼻だって人間よりずっときく。

人の気配を敏感に察知するから、警戒心が強い子ならあっという間に逃げられちゃうんだ。

幸い、白猫は私に気づいていないようだった。こもれびの中で、気持ちよさそうにしっぽをゆらゆらと動かしている。

猫って、なんて完璧なフォルムなんだろう。三角形の耳に、逆三角形の顔。横顔も、後頭部も、座っている姿も、寝顔も、どれも最高に美しくて、めちゃくちゃかわいいんだ。

尊い気持ちで胸をいっぱいにしながら、私は十メートルほど先の白猫をながめた。

私がこれだけ離れているのには、理由がある。もちろん猫に気づかれないためでもあるんだけど、それだけじゃない。

実は私、ひどい猫アレルギーなんだ。猫にふれるどころか、近づくだけでくしゃみと鼻水が止まらなくなってしまう。

こんなに猫が大好きなのにふれ合えないなんて、すごく悲しいけど。

それでも、こうしてこっそり野良猫をながめることが、私の唯一の楽しみになっている。

今日も、散歩の途中で「猫レーダー」が反応したおかげで、この神社に来ることができた。

猫レーダーっていうのは、私の眉毛のこと。

猫が近くにいることを察知すると、なぜか眉がぴくぴくっとけいれんするんだ。

アレルギーが関係してるのかなって思ったけど、本当のところはよくわからない。

不思議ではあるけれど、猫好きな私にとってはなんともありがたい能力だ。

小学生の頃からずっと、ひまさえあればこうして外に出て、眉が反応するのを待っている。

明日は、中学の入学式。正直不安だし、緊張しているけれど、猫成分を充電できたおかげでがんばれそうな気がしてくる。
そのとき、白猫がはっと顔を上げた。
きょろきょろとあたりを見回し、静かに社殿のほうへと歩いていく。
（どうしたんだろう？）
白猫が社殿の裏に回ったのを見て、私は足音を立てずに移動した。社殿の近くの木にかくれ、白猫の消えていったほうを見やる。
そこにいたのは、猫――ではなく、ひとりの男の子だった。
同い年、くらいだろうか。青っぽい黒髪に、白い肌。だぼっとしたフード付きパーカーの下からは、ジーンズに包まれた細い脚が伸びている。
その足元にすり寄った白猫が、「クルル」と子猫のような声を出す。
すると、彼はアーモンド形の大きな目を白猫のほうへと向けた。
「……なるほど。ここは、いい町のようだな」
間髪を入れずに、白猫は彼を見上げて「ニャア」と鳴いた。
かくれていることも忘れて、男の子に見入る。

今のは、一体なんだろう。まるで、猫と会話をしていたような……？

――パキッ！

はっと、体がこわばる。もっとよく見ようと足を踏み出して、枝を踏んでしまったんだ。

あわてて木の陰にかくれて、そっと男の子のいたほうをうかがう。
そこにいたのは、こちらを振り返る一匹の白猫だけ。
男の子の姿はもう、どこにもなかった。

再会

「みなさん、入学おめでとう！」
翌日。体育館で校長先生の話を聞きながら、私はぼうっと昨日の出来事について考えていた。
（あの男の子、どうして一瞬で消えちゃったんだろう……）
目を離したのは、ほんの数秒間だった。あの後、神社の中をさがしたけれど、境内にも、道に下りる石段にも、男の子の姿は見つけられなかったんだ。
気づけば白猫もいなくなっていたし、「もしかしたら幻覚だった？」って、しばらくの間立ち尽くしてしまった。
そう思ってしまったのは、彼のあの外見のせいだ。
ふわっとした、ツヤのある黒髪。カッパーブラウンの、アーモンド形の瞳。
彼は、似てたんだ。小学生のときに仲良しだった、ある一匹の猫に。
その猫――コハクの面影を思い出し、胸があたたかくなる。同時に、ぴりりと痛んだ。

そのとき、前の列に座っていた女子が目に入った。
背中まで届く長い髪が、朝日を受けてつやつやと光っている。
（そっか。かなで、同じクラスになったんだっけ）
海野奏。小学三年生のときまで、私の親友だった女の子だ。
昔と変わらない、見慣れた後ろ姿。けれど背はずいぶん伸びたし、元から上品だった顔立ちもさらに大人っぽくなっている。
かなでとは、もうずっとしゃべっていない。
とある事件があってから、私と口をきいてくれなくなってしまったんだ。
（あれからもう四年、かぁ……）
ふっと、体育館の明るい窓を見上げる。
私、中学生になったよ――コハク。

式が終わって教室に戻ると、クラスメイトたちはそれぞれ固まっておしゃべりを始めていた。
男子も女子も、もうグループができているみたい。すごい。みんな友達作るの、上手だなあ。
「よろしくー！　って……あれ？　リン？」

声をかけられてはっと顔を上げると、そこには同じ小学校出身の女子、加々見ルカがいた。
ルカはポニーテールの頭をかしげて、困ったような顔で笑う。
「ああ、髪切ったんだ。ちがう人だと思っちゃった」
「だめじゃん、ルカ。ウソつきの変人に話しかけちゃ」
窓際のほうで、別の女子が言う。ルカは頭をかきながらそちらに歩いていく。
「危なかったー。ウソつきがうつっちゃうところだった」
「妄想癖も、でしょ？」
くすくすという笑い声で、言おうとしていた「よろしく」という言葉が行き場をなくす。
窓際にいる女子の中には、かなでもいた。一瞬目が合ったけれど、すぐにそらされてしまう。
（やっぱり私、ここでも「ウソつきの変人」のままなんだ……）
聞こえないようにため息をつき、出席番号順に割り当てられた席に座る。
こうなること、予想はしてた。
結局、小学校のときと変わらず、ひとりぼっちの学校生活を送ることになりそうだ。
「よーしみんな、席に着けー」
先生が入ってくると、みんながいっせいに自分の席へと戻っていった。

（あれ？　私の前、空席？）
私の席は、窓から三列目の一番後ろ。ひとつ前の席には、だれも座っていなかった。
お休み、なのかな。入学式に出られないなんて、よっぽど具合が悪いとか？
黒板に書かれた座席表で、名前を見ようとする。けれど、教壇に立つ先生でかくれてしまって、どうしても見えない。
「このクラスの担任になった岩崎です。男子の体育を担当しています。一年間、よろしくたのむ」
先生が、そう言ったとき。
ガラッと音がして、クラスメイトたちの視線がいっせいにドアのほうへと向けられた。
「――すみません。遅くなりました」
ドアを開けて入ってきたのは、ひとりの男の子だった。
その姿を見て、思わず息をのむ。
ふわっとした、ツヤのある黒髪。カッパーブラウンの、アーモンド形の瞳……。
昨日神社で見た、あの男の子だ！

コハクの思い出

「まったく、入学式から遅刻するとは何事だ。ええと――」
「月影です。すみません」
小さく頭を下げると、彼――月影くんは、静かに歩いて私の前の席に座った。
岩崎先生は、月影くんと手元の名簿を交互に見て、眉間にシワを寄せる。
「出席番号二十三番、月影アオ。今日から中学生なんだ。いつまでも小学生気分でいてもらっちゃ困るぞ」
「はい」
返事は小さかったけれど、この声、たしかに聞き覚えがある。
昨日神社で聞いた声と、まったく同じだ。
（やっぱり、幻覚じゃなかった。あれは、現実だったんだ！）
猫と話していた、不思議な男の子。その彼の頭が、すぐ目の前にあった。
きれいな黒髪は、ふわふわしていてツヤがあって、とってもやわらかそうで。

見ているうちに、心の奥深くにしまった記憶がしゅるしゅると浮かび上がってくる。
黒猫のコハクの、つやつやとした背中。目を細めた、うっとり顔。
なでているときの幸せな気持ちが、にわかによみがえってくるようだった。
（さわりたい、な……）
うずうずとしながら、月影くんの黒髪をながめる。
気づくと、手が動いていた。彼の後頭部に向かって、ゆっくりと吸い寄せられていく。
（――ハッ!?　危ない危ないっ！）
あわてて手を引っこめる。ドキドキする胸を落ち着かせようと、静かに深呼吸をした。
「それじゃあ、今週のスケジュールについて説明する。よく聞けよ」
先生の話もそこそこに、私はその後ずっと、月影くんの後頭部に見入っていた。

ホームルームが終わり、ひとりで学校を出る。帰り道を歩きながら、私は小さく息をついた。
（月影くんの髪、きれいだったなぁ……）
一体、どんな手ざわりなんだろう。
お願いしたら、さわらせてもらえるかな……って、いやいやいや！

そんなこと、できるわけないってば。
まずいなあ。これじゃウソつきはともかく、ほんとに「変人」になっちゃうよ。
まあ、猫好き度に関しては、普通じゃないのかもしれないけど……。
と、そのとき。ぴくぴくっと、眉がけいれんした。猫レーダーの反応だ！
あたりをきょろきょろと見回す。左には、大きなマンション。右には、一戸建ての家がならんでいる。その間に、せまい路地が伸びていた。
（きっと、こっちだ！）
路地に入り、音を立てないようにそろそろと進む。思ったとおり、眉のぴくぴくが大きくなる。
猫は、静かで暗い場所が好きだ。さらに、せまければ最高。しげみの中とか、下水溝の中とかね。人の来ない、安心してくつろげる場所にいることが多いんだ。
（……いた！）
民家の軒先、エアコンの室外機の陰に、大きな茶トラの猫が寝そべっていた。ふくらんだ頬に、がっしりとした体つき。これは、オスだ。
茶トラって、だいたい八割がオスなんだって。なんでも、毛の色を決める遺伝子が性別の決

定にも関わっているとかなんとか。
猫って毛の色や種類によって性格がちがうんだけど、茶トラはフレンドリーで人なつっこい子が多いんだ。野良猫でも、茶トラの猫はむこうから人間に近づいてくることもあるくらい。
私は、そっと茶トラくんに近づいていった。フェンス越しに二メートルの距離まで近づいて、ゴールドの瞳やピンクの鼻、ふわふわのシマシマをながめる。
（はあっ。眼福っ！）
さわりたい気持ちをガマンしながら、ひとときの幸せをかみしめる。
猫って、見ているだけで幸せになってくるんだよね。
どんなにつらいことがあっても、猫がそばにいてくれるだけで、しずんでいた気持ちがふわふわとあったかくなっていくんだ。

昔、おばあちゃんの家に、コハクっていう黒猫がいた。
おばあちゃんの家は、私の住むアパートから歩いて十分かからない距離にあった。小学校に上がってからは、コハクに会いたくて毎日のように通っていたんだ。
ペット禁止のアパートだから、うちでは動物を飼うことができなかったんだけど。私は動物

が大好きだったから、コハクの存在がうれしくてたまらなかった。
コハクのつやつやの毛並みは、本当にきれいだった。なでるとすぐにゴロゴロ言い始めて、うっとり目を細めて。カッパーブラウンの瞳が私を見つめるまなざしは、優しさに満ちていた。
学校でつらいことがあったとき、コハクはそっと私の隣に寄り添ってくれた。黙って座って、あたたかい体温を分けてくれるみたいに。私が元気を取り戻すまで、ずっとそばにいてくれた。
だけど……。
私が小学三年生になった頃、コハクは死んでしまった。
あの日私は、おばあちゃんの家の裏にある竹やぶにいた。タケノコを見つけたらおばあちゃんが喜ぶと思って、ついひとりで、いつもは行かないほうまで行ってしまった。
そこで、大きなヘビと出会ってしまったんだ。
生まれて初めて見るヘビに、私の足はすくんでしまった。ヘビがゆっくりとこっちに向かってくるのを見ても、私の体は石のように固まってしまって、動くことができなかった。
そこに、コハクがやって来た。「どうしてここに」と思ったのもつかの間、コハクはうなり声を上げてパンチを繰り出した。そして、長い格闘の末にヘビを追い払ってくれた。

ふるえながらコハクを抱き寄せると、その首にヘビの小さなキバが刺さっているのが見えた。
コハクが死んでしまったのは、その次の日のことだった。
コハクを追いかけるように、おばあちゃんも死んでしまって、その次は、お母さんが病気で死んでしまって。消防署に勤めるお父さんは、夜勤が多くて家にいないことがほとんど。
コハクがいなくなってから、私はあっという間にひとりぼっちになってしまった。
正確には……そうなる前に、ひとりだけ友達がいたんだけど。
その友達――かなでも、コハクの死がきっかけで、私から離れていってしまった。
コハクが死んでしまったのは、私のせいだ。
コハクは、私をヘビから守ろうとしてかまれてしまった。ヘビの毒が、コハクの命をうばってしまったんだ。
「ナーオ」
はっと我に返る。見ると、茶トラくんがいつの間にか私の足元にすり寄ってきていた。
「わ、わわっ……！」
おどろきとうれしさとで、変な声が出る。茶トラくんは私の足に顔をこすりつけると、じっと私の顔を見上げた。

（これは、なでなでしてほしいアピール……！）
すぐに離れなければ、アレルギー症状が出てしまう。頭では、そうわかっているのに。
私の手は、茶トラくんの背中に置かれていた。
「ゴロゴロゴロ……」
喉を鳴らす茶トラくんの、ふわふわの毛。
コハクが死んでしまって以来の初めての猫の感触に、じわりと涙がにじんだ。
（やわらかくて、あったかい……）
アレルギー症状が出るようになったのは、コハクが死んでしまった後のことだ。
ふさぎこんでいた私を見かねたのか、お父さんが「知り合いの家で子猫が生まれた」と言って連れていってくれたことがある。
でも、着いて十分も経たないうちに、くしゃみと鼻水が止まらなくなってしまったんだ。
「――くしゅんっ!!」
大きなくしゃみに、茶トラくんはびっくりして体を縮めた。猫は、大きな音が苦手なんだ。
「ごめんね。もう行くから……元気でね。くしゅんっ!!」
鼻声で言いながら、私はきょとんとした顔の茶トラくんを残し、その場を後にした。

うたがいの目

それから、一週間が経った。
本格的に授業が始まって、部活の仮入部期間も始まった。
教室は、中学校生活の始まりに緊張しつつも、ワクワクした空気で満ちている。
でも、そんな空気とは無縁の人間が、ここにひとり。……いや、二人いた。
ひとりは、私。相変わらず友達はいないし、入りたい部活もないし、根無し草みたいに浮いている。
そして、もうひとりは――月影くん。
クラスメイトの話をちらっと聞いて知ったんだけど、彼は最近この町に引っ越してきたばかりなんだって。つまり、同じ小学校出身の知り合いがひとりもいないってことだ。
遅刻はさすがにしなくなったけれど、授業中はほとんど机に突っ伏している。
心地よさそうな寝息が聞こえてきたときは、びっくりした。度胸あるなあって。
先生に注意されれば、体は起こすけれど。次の授業では、また元どおり。

休み時間には、すっとどこかに消えてしまうんだ。
音もなくいなくなっちゃうから、月影くんが休み時間にどこで何をしているのか、みんな知らないみたい。
こんな状態だからクラスメイトと言葉を交わすこともなくて、特に女子からは「こわい」ってさけられてる。
でも、私はそうは思えない。
神社で白猫と話していたときの彼の優しい声と表情が、頭から離れないんだ。
今思えば、あれはぜんぜん不思議なことじゃない。
私だってよくコハクに話しかけていたし、コハクの鳴き声を勝手に解釈して受け取ってた。
コハクはあんまりよく鳴く子じゃなかったけど、だからこそたまに聞ける鳴き声が、彼の心からのメッセージのような気がして。それを聞くたびに、すごくうれしかったんだ。
きっと月影くんも、猫が好きなんだ。
（友達に……なれないかな）
黒いツヤのある髪の毛を見つめながら、はっとして首を振る。
私みたいな変人と友達になるなんて、月影くんからしたら迷惑以外のなにものでもない。